

「今山の農村舞台」 復活への活動

徳島県立博物館
民俗担当学芸員

庄武憲子

●活動の始まり

二〇〇二年一月十九、二十日に、勝浦町今山今宮神社に残る農村舞台が、人形浄瑠璃芝居を上演していた当時の形に、地元の人達の手によって復元されました。その作業が今山の農村舞台復活への最初の動きでした。

人形浄瑠璃芝居が盛んであった徳島県にはたくさん農村舞台があったことが言われています。けれども、農村舞台はひとつそりと眠り、人々の記憶から薄れていきつづけてあります。今山の農村舞台も長い間雨戸を閉ざして建っていました。舞台としての形に復元することとなったきっかけは、徳島市出身の川上光洋氏の調査・研究によつて、この舞台が「仮設式舟底舞台」とされる特徴的な形式を持つものだと言明されたことです。農村舞台には、大きく分けて、床全面が平らな平舞台と人形芝居上演向けの、床面に上段、下段の段差を持つ舟底舞台と呼ぶ形式があります。今山の農村舞台は平常時は平舞台ですが、人形芝居を行う時には床に段差を設け舟底舞台に転換できるしくみになっています。このようなくみをもつ「仮設式舟底舞台」の現存数は非常に少ないそうです。

川上氏から今山の農村舞台の意義を知り受けた、今山在住で人形座・勝浦座に在籍している新居福夫氏が地区の人々に声をかけ、他に山本靖広(区長)、前野善弘(宮総代)、岡田勤(宮総代)、田中実、今岡重幸、大久保巖、山畑和男、中野清、山村治、山村英男の諸氏(役名はすべて

二〇〇二年当時)が、地区の舞台の本来の姿を取り戻してみようと、休日に集まり、川上氏とともに平舞台から舟底舞台への転換という復元の作業を行いました。地区の人々の息のあった共同作業、培われてきた記憶と技術が重なり合つて見事に舞台は人形芝居むけの舟底舞台に変身し、「仮設式舟底舞台」の機能が蘇りました。この時今山地区の人々を中心に保存会が結成され、舞台の保存・活用へ向けての本格的な活動が始まりました。

●舞台復活のお披露目

保存会結成の約八ヶ月後の二〇〇二年九月二十八日には、舞台のお披露目となる人形浄瑠璃芝居や地元の人々による日舞、お手玉、三味線、詩吟等が上演されました。

当日は、日本建築学会四国支部の主催により、今山地区で「阿波の農村舞台と人形浄瑠璃」というテーマのもと、講演会・パネルディスカッションが行われ、今山の農村舞台の意義や保存活動の状況、今後の指針などが集まった人々に周知されました。その後実際舞台のお披露目として舟底舞台の形で人形浄瑠璃芝居が約五十年ぶりに上演されました。また人形芝居上演の後には舞台の機能をいかし、すばやく床板が組み換えられて平舞台への転換が行われ、子供から大人まで地元の人々が、お手玉演舞、ダンス、日舞や詩吟などを演じました。舞台のお披露目は、保存会の人員を中心に地元の人々が協力しあつて、傷みのひどかった太夫座や舞台の床板や、屋根瓦の一部を応急処置するなどの尽力によつて実現しました。上演時には舞台の周囲に屋台が並ぶなどして賑わいました。集まってきた人々は親子、孫の三代にわたる家族連れが多く、時には持参の食物やお茶を口にしながら和気あいあいと演目を楽しんでいました。また秋の宵に灯された舞台上演の光はとても美しく、地元の人々の努力のかいあつて、農村舞台の雰囲気、また舞

台が活用される楽しさが、少なからず集まった人々に伝わったのではないかと思います。その後舞台は町有文化財に指定され、また、文化庁の助成金によつて襖、幕などが補修・新調されました。この二〇〇三年五月四日にも、人形浄瑠璃芝居が上演され大変盛況でした。舞台復活のための保存会を中心とした地元の人々の努力と勢いは、本当に素晴らしいものだと思います。



▲補修、新調された襖のお披露目が成される
今山農村舞台(2003年5月4日)



▲復活最初の取り組みとなった
舞台復元の作業の様子(2002年1月20日)